

The  
Kyushu  
University  
Museum

# News

No.19 九州大学総合研究博物館ニュース

## 新館長決まる

2月14日開催の第4回博物館運営委員会で農学研究院環境農学部門の吉田茂二郎教授が次期博物館長候補として選出されました。4月1日の総長発令で正式に第7代館長に就任されることになります。吉田先生は附属演習林長の経験もありますので、博物館が森林を含むグリーン環境に果たす役割について新たな展開が期待されます。

総合研究博物館第6代館長 竹田 仰



Photo by Takeshi Sakamura

## 知春草生 春草ノ生ズルヲ知ル

I  
九州大学総合研究博物館特別企画  
― 活きる木製什器展 ―

期間：2013年3月11日(月)～18日(月)

場所：箱崎キャンパス総合研究博物館  
第一分館倉庫および常設展示室

担当：三島 美佐子  
開示研究系・准教授  
松本 隆史  
開示研究系・助教

工学部移転を機に学内で廃棄された、または、廃棄予定であった家具などの木製什器を、当館がレスキュー(救済)しはじめてはや7年。まれに「九州帝国大学」プレートがついていたりするこの家具類は、これまで展示台などに利用されてい

ましたが、今回初めて「主役」になりました。今回の「知春草生」は、知的好奇心を刺激する解説展示と、感性的な味わいの空間展示をそれぞれお楽しみいただく2部構成。まず解説展示では、旧工学部本館3階の常設展示室において、昨年度から農学部

が本格的に取り組み始めた木製家具リペア事業を中心に、本学における教育資産の活用のあり方について解説いたしました。リペア前後の実物家具が見所でした。このリペア事業の中核を担う農学部の吉田先生には、3月14日の「夜カフェ」で、事業の

〈p.2へ続く〉



## 催事・展示クローズアップ

経緯やその背景にある思いを、宮崎演習林との遠隔通信で語っていただきました。

第一分館倉庫の空間展示では、雰囲気をはりりと変え、レスキューした時のままの味わい深い什器類をアレンジ。会期前半には、これまでもコラボレーションしてきたアートユニット「qulte」



展示風景

が、家具類に植物標本を添え、後半は、熊本で骨董店とカフェを営む花人の坂村岳志氏が、キャンパス内の花を用いた「いけこみ」で、独特な空間を演出しました。

予想以上のご来場をいただき、ご足労いただきました皆様へ深く御礼申し上げます。この展示をとおして、九大の歴史ある教育研究文化財を、完全移転にむけしっかりと回収し、研究や教育を支えた貴重な大学資産として保管・活用していくことの意義と必要性を、学内外のみなさんにお伝えできていたら幸いです。



Photo by Takeshi Sakamura

花人・坂村岳志氏のいけこみ。熊本の「さかむら」にて。

## II 宇部高校 SSH 研修

期間：2012年12月11日(火)～12日(水)

場所：博物館施設各所

担当：当館教員全員（総括：岩永 省三）

古人骨資料についての  
成果発表



SSH(スーパー・サイエンス・ハイスクール)は、文科省の指定を受けた高校が先進的理数教育の実施などの取り組みを実施するものです。2・3年生での課題研究準備としての1年生研修を受け入れました。理数科生40名を対象に、大学博物館における調査研究の講義、分野別実習、レポート作成・成果発表指導を館員総出で実施しました。実物標本を用いた実習に興味津々で熱心に取り組んでくれた高校生諸君が、当館の活動や大学での研究に興味関心を抱き、将来九大に入学して下さることを願っています。

## III こどもっと だいがく

期間：2012年10月6日(土)～27日(土)

場所：シーマークビル1F  
福岡ビジネス創造センター

担当：竹田 仰 総合研究博物館長

小学生を対象に「感覚の不思議シリーズ」なる実験を交えた授業を7回しました。これは、福岡市港湾局と当博物館がアイランドシティの活性化の企画として行ったもので、視覚や聴覚、触覚に関する面白い現象を芸工院や山口情報芸術センターの講師ら6人で分担しました。

写真は、「さわってもだまされる」の製作風景で、指で触ると凹んで感じることを扱っています。



親子で仲良く工作だ！

## たんけんみらいタウン —学んで創エネ あそんで省エネ—

期間：2012年11月23日(金)～25日(日)

場所：アイランドシティ・  
アーバンデザインセンター1階ホール

担当：三島 美佐子 開示研究系・准教授

公開展示第二弾の科学展示として、アーバンデザインセンターと共催で開催されました。小学生や親子づれが楽しく遊んで学べることを目標に、会場の8割がハンズオン※。今回のテーマ「エネルギー」にあわせて作った本格的なカードゲーム、九大の水素ステーションやレンズ風車などのペーパークラフト、無駄な電気を消す大きいモグラたたきのようなゲームほか、みなさんにとっても楽しんで頂けた様子です。本学応用力学研究所からお借りした発電機も、電気が流れることを体感でき、大変人気でした。総来場者数は170名弱とコンパクトでしたが、



ふだん企業セミナーなどが開催される会場が、華やかに大変身。

来場した皆さんの滞在時間が3時間前後と長く、そんな皆さんを、事前研修を受けた学生コミュニケーターたちがしっかりとサポートしてくれました。

※ハンズオン：ここでは、手にとることのできる体験的な学習ツールや双方向的な環境のこと。

# Close-up Event & Exhibition

## IV ースタチオポンテ 10周年記念作品展ー アルファベットが つなぐ時間

期間：2012年10月6日(土)～14日(日)

場所：旧工学部本館3階常設展示室、  
同4階会議室、同5階展望室

担当：初島 さつき スタチオポンテ主宰



デモンストレーションする筆者

芸術の秋真っ盛りの10月、九州大学総合研究博物館との共催で、アルファベットの芸術である、カリグラフィ展を開催いたしました。期間中ずっと晴天にも恵まれ、連日たくさんの方が見に来て下さいました。3部屋をお借りしての展示となりましたが、博物館では、カリグラフィの歴史に焦点をあて、中世の写本や羊皮紙、羽根ペンなどのツールも展示いたしました。まるで迎賓館のような会議室には会員の作品をずらりと並べ、作品鑑賞にぴったりのくつろいだ雰囲気となりました。5階展望室では1.2m×7mの大作を床に広げ、その間にはランタンのような変形ブックをちりばめて、部屋全体で1つの作品としました。建築物としても歴史と趣のある会場での展示でしたので、見学者からは作品と会場の雰囲気がぴったりとお声をたくさん頂戴でき、このような機会をいただいたことを大変感謝しております。

## V ー九州大学総合研究博物館 平成24年度公開講演会ー 自然史標本の最新作成技術と魅せ方

期間：2013年2月23日(土)

場所：箱崎キャンパス21世紀交流プラザ I  
1階多目的ホール

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教

近年、自然史標本の作製法が急激に変化しつつあり、乾燥標本や液浸標本といった伝統的な標本作製手法に、樹脂封入標本や透明標本など、新たな作製技術が加わった。そこで今回は、大阪市立自然史博物館で「なにわホネホネ団」を結成し、骨格標本作製に活躍する西澤真樹子さん、透明標本作家として美しい写真集を出版し、一世風靡した富田伊織さん、兵庫県立人と自然の博物館で標本を用いた自然教育を邁進している三橋弘宗さんをお呼びし、当館で微小昆虫の撮影と展示技術について実践研究している筆者、出張病院展示を行っている阿部祥子専門研究員も演者に加わり、それぞれの標本作製法や展示の事例紹介を行った。近年、自然史



透明標本の前で講演する富田伊織氏

標本に興味を持つ層が広がりつつある。今回の講演会はそのことを如実に表わすように、若い世代を含め、幅広い年代の来場者でにぎわった。面白い作業現場の様子、ため息の出るほど美しい標本の数々、感動的な展示場面など、どれも大変興味深いもので、長丁場にもかかわらず、終始熱気を帯びた会となった。普及啓蒙を目的とした標本資料の効果的な利用は、市民や大学関係者に対する博物館への理解においてもっとも重要な課題の一つであり、その点で、今回の講演会は、博物館関係者にとっても意義深いものとなった。

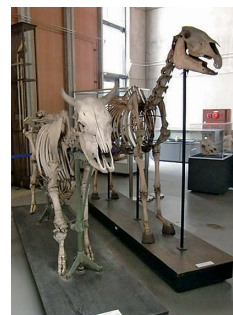
## VI 記念講堂に骨の動物園誕生！

公開開始：2012年10月～

場所：記念講堂3階

担当：舟橋 京子 開示研究系・助教

農学部の伊都への移転準備開始に伴い、畜産学第二講座から動物骨格標本や剥製が2012年6月に当館に移管されました。立派な標本ですので、その一部の展示・公開を始めました。骨格標本は、ウシ(和牛)・ウマの全身骨格と、キリン・サイ・ゾウなどの野生動物の部分骨格で、比較



動物の骨は細かい所まで見比べると面白い

解剖学的観点から展示してありますので、違う

動物の同じ部分(脚の構造など)を見比べると面白いことが判ってきます。剥製はタンチョウ・オナガドリのほか六本松図書館旧蔵のヒグマで見応えがあります。

## Series: OIKAKETE

シリーズ・追いかけて

## アンモノイドを追いかけて -ロシア太平洋艦隊基地すぐそば探訪記-

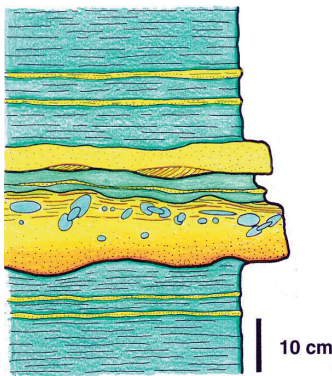
前田 晴良 分析技術開発系・教授 専門:古生物学



図A) 沿海州調査中の昼食風景。右端が重田康成氏



図B) ロシア沿海州産・三畳紀前期アンモノイド化石の例



図C) アンモノイド化石を含む乱泥流層の露頭スケッチ



図D) 基地わきに横たわる射撃訓練の標的にされた車の残骸

絶滅生物:アンモノイド(=アンモナイト類の総称)の研究は、事件の捜査と同様、遺骸の発見現場(=化石が出る露頭)に赴いて現場検証することから始まります。しかし遺骸が埋没した当時の海底は、同じ時代の二枚貝・ウニ・甲殻類といった“野次馬生物”たちに踏み荒らされていることがほとんどです。

ところが長い地球史の間には、海底が荒らされなかった時期もあります。そのひとつが中生代三畳紀前期(約2億5,100万年前からの500万年間)です。この時代は海生生物の約95%が滅んだペルム期末の大量絶滅の直後にあたり、生態系はその大きすぎるダメージから回復するのに手間取っていました。また海水循環が滞って汎世界的に海底付近が酸素不足に陥っていたため、底生生物の活動も不活発でした。この時代の海底には自然界の“非常線”が張られ、野次馬生物を閉め出していたのです。このチャンスを見逃すわけにはいきません。

私たちは三畳紀前期の地層が連続的に露出するロシアの沿海州に眼をつけました。しかし、ここは軍事的要衝にあるために約100年間にわたって外国人が足を踏み入れられなかった地域です。その中で私の盟友:重田康成博士(国立科学博物館)をチーフとする日本の研究チームは、諸外国に先駆けてロシアと研究協定を結び、1998年以来、十数回にわたって三畳紀前期の化石群の調査を実施しています(図A)。

沿海州の州都:ウラジオストックは欧州風の街並みがきれいな都会で、比較的安全です。ただ、郊外には巨大な

ウスリー・タイガーが出没するという話を聞いて肝を冷やしました。

ロシア人研究者と合流したら、さっそく岬巡りです。ウラジオストック-ナホトカ間の海岸線は複雑に入り組んでおり、岬の突端に三畳紀の地層がよく露出して化石も多産します(図B)。調査の結果、アンモノイドの死後、遺骸が乱泥流に巻き込まれて少なくとも10km以上海底を流れ下り、沖合の海底で再堆積したことがわかりました。死亡した場所と死体の発見現場が異なるという推理小説の一場面のような事実が浮かび上がった訳です。これも遺骸の埋没現場が踏み荒らされずに残っていたおかげです(図C)。

ところがロシアの調査は一筋縄ではいきません。あらかじめ軍事施設を避けて計画を立てたはずなのですが、行く先々でロシア人も初耳という地図上にはない海軍施設に出くわすのです(図D)。フリゲート艦が隠された基地のすぐそばの崖を、AK74を担ぐ歩哨の目を気にしながら調査するのは、許可証を持っていてもなお緊張します。実はロシア太平洋艦隊は、ウラジオストック港内だけではなく、郊外の多数の入り江に数隻ずつ分散配備されていたのです。敵の攻撃で一度に全滅するのを回避しようという冷戦時代の戦略を垣間見た気がしました。

何億年の時間を扱う地球史や進化史の研究は、わずかに100年間の現代史に翻弄され続けてきました。しかし21世紀のいま、日ロ共同研究により三畳紀の進化史のシナリオを書き換えるデータが集まりつつあります。乞うご期待!

## Series: Museum Jobs from A to Z

シリーズ・大学博物館のお仕事紹介

## 九州大学ミュージアムバスプロジェクト

齋藤 俊文 芸術工学研究院・准教授 専門: 広告デザイン・クリエイティブディレクション・コミュニケーション戦略

バス車内を学術標本の広告ポスターで埋め尽くす、しかも月替わりで9ヶ月間に渡って九州大学の貴重なコレクションの数々を掲出する、という前代未聞のプロジェクトはテレビ、新聞、ウェブ他、沢山のメディアに取り上げられ、西日本鉄道株式会社のご協力の元、好評の内にその一年を完遂した。

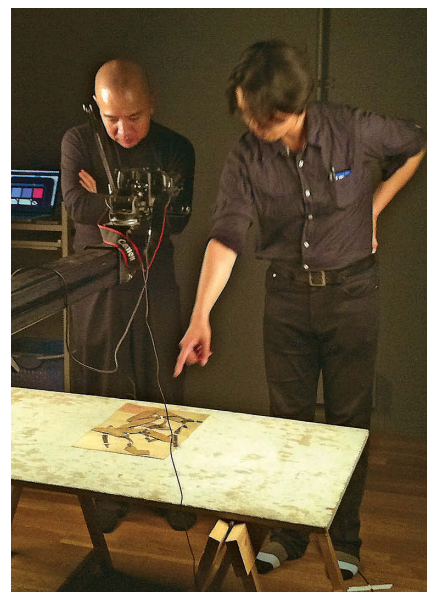
遡ること1年半前、学術標本の魅力を公共交通機関の広告媒体という日常生活の場面を通じて伝えることが、いかにエキサイティングで、イリュージョンに満ちた企てであるかを、館長と二人熱く語り合った。総合研究博物館と芸術工学研究院が有機的にコラボレートした結果、前例のない、美しくも妖しく、面白くも奥深い、広告プロジェクトが実現した。無理な要望に快くお応え頂き、粘り強くお付合い下さった博物館の教員の皆様に心より御礼申し上げます。さらに本プロジェクトの意義に鋭敏に反応し、労を惜しまず、至誠なる作業を遂行してくれた芸術工学府の俊英な大学院生たちに深く感謝する。

学術論文とは異なる手法で、また博物館という箱とは別の場所で、標本や資料の

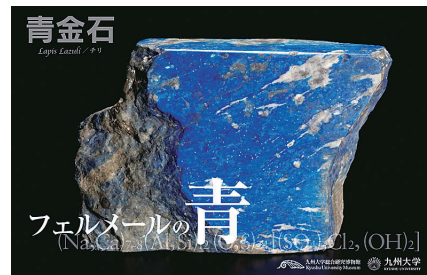
魅力を人々に伝えようとするとき、デザインはとても有効な手段である。対象の本質を、ときに隠れて見え難くなっている魅力を明かすために、情報を整理し、技術を駆使するのがデザイン行為である。ただし、方法論に囚われるあまり、雑多な“デザイン擬き”の形骸が世に蔓延しているのも事実で、流行や作家性でデザインを語る風潮には常々閉口している。

プロジェクトでは、学術標本に向き合い、目を凝らし、写真に収め、その道を究めた研究者に直接取材できるという、至福のひとつの瞬間が毎月実現することとなった。そこには、オブジェが放つ不思議な力が満ち、研究者の飽くなき探究心がみなぎり、自然と文化に対する敬意が溢れていた。この現場を体感した上で誕生した写真、コピー、ポスター、Facebook といった表現には、見る者の心をつかむ強い力が備わっていた。デザインが果たすべき役割を改めて教えてもらった気がする。

200枚を超える珠玉のポスターは、一冊の本にまとめられ、時を超えて学術標本の魅力を語り続ける。「美しい研究」の数々を今一度ご覧いただきたい。



植物標本の撮影打合せをする  
齋藤俊文准教授と写真家の荒巻大樹氏(九州産業大学)



フェルメールの青～青金石(2012年7月掲出)  
制作協力: 企画・デザイン/九州大学齋藤俊文研究室、写真/荒巻大樹

## COLUMN

## 博学連携

## 小学校との連携: 理科室前にサイエンス・ミュージアム出現

担当: 三島 美佐子 開示研究系・准教授

理科室前をわくわくする場所に変えたい!という校長先生の思いと、子ども達の身近に本物の標本に触れ

られる機会をつくり、ミュージアムリテラシーを育みたいという当館の思いが出会ったモデルプロジェクト

「香椎東小サイエンス・ミュージアム」が、平成25年1月から始まりました。第一回目の「アポロ宇宙船月面着陸」では、中牟田准教授制作の宇宙船模型と当館所蔵の隕石標本を組み合わせました。鉄隕石の実物を持ち上げて「重い!」と驚いたり、表面を虫眼鏡で一所懸命覗き込む子どもたちの姿が見られました。展示作りは、「私にもできるかも」と子どもたちが

思えるように、最初から完璧なものを出すのではなく、ちょっとずつ出来あがっていくのが見えるようにしています。



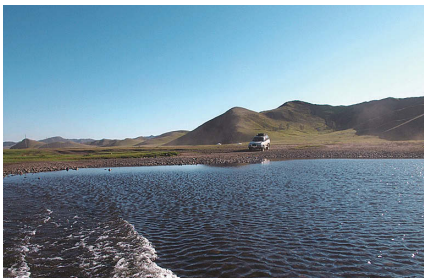
目玉のさわれる標本は「鉄隕石」

## シリーズ・九大博物館での研究の紹介

国際交流

## モンゴルの草原を行くー国際地質巡検に参加してー

中西 哲也 分析技術開発系・准教授 専門: 鉱床学、鉱山技術史



川を渡るランドクルーザー



Erdenet 鉱山の露天採掘(ベンチ1段は15m)



Boroo 鉱山の石英脈中の自然金(粒径約1mm)

モンゴルは人口約290万人の国ですが、日本の約4倍の国土面積を持ち、石炭、金、銅、モリブデン等豊富な地下資源を埋蔵しています。筆者は2011年度より、モンゴル科学技術大学のジャルガラン教授の協力により、九大工学部地球資源システム工学専攻の学生1名と共に、ウランバートル北部の金鉱床の調査を進めています。調査では、Boroo 鉱山の露頭で採取した試料や、Gatuurt 鉱床のボーリングコアの試料に含まれる石英中の流体包有物(結晶中に閉じ込められた液体)を調べる事で、鉱床を形成した鉱化流体の温度や組成を知る事ができます。

2012年9月3日～6日の日程で、第2回日本鉱物科学会・モンゴル資源地質学会合同現地地質見学会が開催され、日本

からは筆者の他5名が参加しました。見学地はモンゴル最大の銅・モリブデン鉱山であるErdenet 鉱山と、現在唯一の露天掘りの金鉱山であるBoroo 鉱山およびテレルジ周辺の花崗岩とペグマタイト露頭でした。

モンゴルの道路事情は基本的に悪く、薄いアスファルト舗装が冬の凍結によりひび割れ、夏になると補修を繰り返すのが現状です。また、幹線から一つ離れると未舗装の道が多く、交通量が少ない所では、草原にうっすらと轍が残る程度です。それでも案内者は迷う事無く丘陵を越え草原を走り続けます。“ランドクルーズ”の意味をあらためて実感し、モンゴルの人々がかつて良馬を欲したように現在はオフロード車が不可欠である事がよく

分かります。

モンゴルの鉱山は、まだまだ未開発の鉱床が多く、多くの鉱山会社が新しい鉱床の探査を進めています。現在南部のゴビ砂漠で開発中のOyu-tolgoi 鉱山は世界最大級の銅鉱山であり、モンゴルの銅生産量は、2013年で2倍、2020年には10倍に増加すると言われていています。但し、モンゴルは地理的にロシアと中国に挟まれ、他国との取引をスムーズに行えないのが実情です。モンゴルの人々からは、より多くの日本企業の参画が期待されていますが、中々難しいのが現状です。このような状況下でのアカデミックな研究交流は日本とモンゴルを繋ぐ重要なツールであり、筆者もモンゴルでの鉱床研究を積極的に行ってゆくつもりです。

## COLUMN

## 館員活躍録

## ボランティア・サポーター活動開始

担当: 三島 美佐子 開示研究系・准教授

昨年12月以来、ボランティア・サポーターの皆さんが、植物標本の整理に来てくれるようになり、標本作製室は毎週とても華やかです。といっても、賑やかなわけではありません。

なぜなら皆さん、黙々と緻密な作業を進めて下さっているからです。その4人のサポーターの皆さんの作業をとりまとめているのは、やはり長年ボランティアにデータベース化に携わってくださっている協力研究員の瀬戸さんです。お陰様で、この

数ヶ月でみるみる標本が整理されてきています。昆虫や工作機械などの分野でもボランティア・サポーターの活動がはじまり、例えば4月13日(土)には工作機械磨きのボランティア・サポート作業があります。ボランティア・サポーターは、プロジェクトごとに受け付けておりますので、ご興味のある方は博物館事務室までお問い合わせ下さい。

博物館事務室の連絡先:

TEL & FAX: 092-642-4252

MAIL: office@museum.kyushu-u.ac.jp



標本作製室で作業中のみなさん



# Series : Research at the Kyusyu University Museum

新任教員による着任のご挨拶と研究紹介

## デザインの手法とメディアの技術による開示研究

松本 隆史 開示研究系・助教 専門：メディアデザイン



松本 隆史 助教

はじめまして。2012年12月に開示研究系助教に着任いたしました松本です。

私は、メディアデザインを専門として、2008年に慶應義塾大学政策・メディア研究科にて博士号を取得し、これまで大学や海外の研究所などで、未来のITプロダクトをデザインするプロジェクトを行って参りました。この度、テニュアトラック制により九州大学に採用され、高等研究院に所属しながら、日々の活動は総合研究博物館にて行っております。

私の専門は、デザインの創造的な手法と新しいメディアの技術を使って、様々なプロダクトや組織の設計をすることです。これまでは主に、新しい製品コンセプトを立案し、未来の技術の可能性を示すことをテーマとして研究をして参りました。学術的にはコンピュータサイエンスの領域で発表することが多いですが、扱う内容は美的なことからプロジェクトマネジメントまで多岐に渡ります。

代表作のインターネット傘は、傘の内側がスクリーンになっていて、立体地図や写真アプリを使って、友達と情報共有をしながら街を探索できるというものです。今でこそスマートフォンで似たことができますが、この作品は2006年、初代iPhoneが米国で発表されるよりも前に開発されたものです。国際会議 Laval Virtual 2007 でイノベーション賞を頂き、海外の様々な国で発表させていただく機会を持ちました。

メディアデザインでは、ハードウェア・ソフトウェアだけでなく、どのように製品やコンテンツを普及させて行くかも設計対象として扱います。情報をきちんと設計しメディアを活用すれば、魅力のある物は、極めて低コストに世界中で紹介することができ、それによって人々の感動や知的好奇心を喚起することができます。このような観点から、博物館では、それぞれの専門分野や所蔵品と社会の皆さんをつなぐ開示研究を行って参ります。

今後、各専門分野の先生方と協働で、新しい技術によるデジタル開示の挑戦もしながら、広く認知された魅力的な博物館になるように邁進して行きたいと思っております。



© Takashi Matsumoto & Sho Hashimoto for Pileus Project / Keio Univ.

インターネット傘 Pileus



© Takashi Matsumoto & Sho Hashimoto for Pileus Project / Keio Univ.

プロトタイプを街の中でテストしています



© Takashi Matsumoto & Sho Hashimoto for Pileus Project / Keio Univ.

スペインでの実演の様子

### COLUMN

### 館長交友録

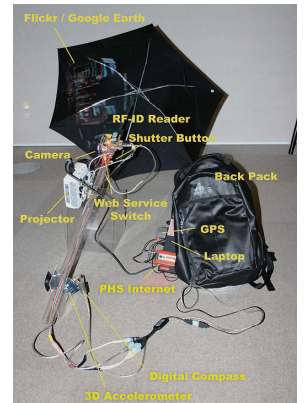
#### 美術館巡り

担当：竹田 仰 総合研究博物館長

11月、長島美術館で、長島裕子館長に会う。アートの森の河口洋一郎館長と「VR文化フォーラムin鹿児島」で対談の下準備。ついで、郷土の藤島武二、黒田清輝などの絵画を

みて鹿児島が明治に重要な働きをしたことを知る。／以下2月のこと。熊本現代美術館の桜井武館長と久し振りに会う。フランスでの現代アートの動きなど聞く。奈良美智展をみて彫刻に感心する。／高知県立文学館の元吉喜志男館長と始めて会う。「文学Media Art展-紀貫之からライトノベル-」の挨拶をする。内容が感覚の文学というコンセプト

のため、仕掛け人は東京都現代美術館の森山朋絵さんの誘いによる。／熊本県立美術館の横田堅館長に会う。日本博物館協会入会に際しての挨拶をする。郷土の野田英夫の絵を見たいという、芸員の高家良一さんを紹介される。芸工大卒業と知りビックリする。野田英夫を知ったのは、10月に信濃デッサン館を訪れたことによる。



プロトタイプの構成

© Takashi Matsumoto & Sho Hashimoto for Pileus Project / Keio Univ.

# Personnel Changes

## 人事往来

### 総合研究博物館 退職の挨拶

2011年4月より2年間総合研究博物館の第6代館長を務めさせていただきました。実際に業務に着いて、これは天職だっ!と感じました。よって2年間は大変楽しく好き放題させていただきました。逆に言うと館の皆さまには大変なご迷惑をおかけしたのではと思っています。この2年間の館の教職員と取り組んだ仕事

をざっと振り返ってみたいと思います。まず、就任後の6月には全国大学博物館等協議会と博物科学会の当番校に当たり司会進行に苦勞しました。また、前年度に博物館の外部評価委員会が終了し、その報告書提出もありました。それと前後して、6月頃からは、前任館長の退職に伴う古生物学担当教授の人事がスタートし、前田晴良教授が承認され'12年の8月に着任の運びとなりました。夏を過ぎて学芸員養成のための新課程の申請準備と、博物館実習を行う理学部や文学部との調整に入りました。11月から、「九州大学百年の宝物」のため九州国立博物館で展示を行い2万3千人の方々を訪問されました。その他にも「キヲクノヒラ」と題してエリックサティと夢みる機械や、河口洋一郎氏のCG大回顧展もありました。また、現在の博物館の様子を伝

えると共にこれからの博物館のあり方を実写映像やCGで綴ったDVD「ミライヲツムグ」を制作しました。年が明けて第一分館で、劇団水族館劇場による「機械仕掛けの糸姫」の公演を雪の降りしきる2日間に300名の来場を得て行いました。このまま続けばきっとあれもこれも引き受けて収集がつかなくなったことと思います。今後のますますのご発展を切に願っています。

第6代館長  
竹田 仰



## 着任

平成24年12月1日付けで、松本隆史が助教として着任しました。(本誌p.7参照)

## 運営委員会

平成24年10月29日  
平成24年11月20日(書面回議)  
平成25年 2月14日  
平成25年 2月21日(書面回議)

## 団体見学

平成24年 9月25日 ベトナム・タイバック大学  
平成24年10月20日 九州大学ホームカミング大学  
& アラムナイフェス  
平成24年10月23日 柏原3丁目シニアクラブ  
平成24年12月24日 日本解剖美術学会福岡支部  
平成25年 1月31日 カテリーナ古楽器研究所

## 日本博物館協会に 4月より入会

博物館施設には、科学館、美術館、水族館、歴史資料館など多様な館が国内で4,000館を超え、運営も国都道府県、個人など多岐にわたっています。これまで当館は、「大学博物館等協議会」という国立大学の博物館からなる組織(約40館)を中心に活動を行っていましたが、大学の館に留まらずさらに多種多様な館との連携を深めるために、(財)日本博物館協会に入会手続きを行い、この4月には承認されます。

# Activities of Exhibitions & Conference

## 展示・講演会関係の活動状況

### 特別企画

- 活きる木製什器展  
「知春草生 春草ノ生ズルヲ知ル」  
期間:平成25年3月11日(月)~18日(月)  
場所:総合研究博物館第一分館倉庫  
および常設展示室

### 特別展示

- 第11回P&P研究成果一般報告  
「九州大学教育・研究の最前線」  
期間:平成24年10月19日(金)~11月18日(日)  
場所:箱崎キャンパス旧工学部本館3階  
入場者数:245名
- 「たんけんみらいタウン、  
学んで創エネ・あそんで省エネ」  
期間:平成24年11月23日(金)~25日(日)  
場所:アイランドシティ  
アーバンデザインセンター1階ホール  
入場者数:164名

### 公開講演会

- 「自然史標本の最新作製技術と魅せ方」  
期間:平成25年2月23日(土)  
場所:箱崎キャンパス21世紀交流プラザ1  
入場者数:85名

### 講座

- サイエンスコミュニケーション講座 in 九州  
「サイエンスコミュニケーション基礎II」  
期間:平成25年3月1日(金)  
場所:箱崎キャンパス旧工学部5号館  
「サイエンスコミュニケーション基礎III」  
期間:平成25年3月19日(火)  
場所:箱崎キャンパス旧工学部5号館

### サイエンスカフェ「夜カフェ」

- ゲスト:九州大学農学研究院  
吉田茂二郎教授  
期間:平成25年3月14日(木)  
場所:総合研究博物館第一分館倉庫